

紹介

松方冬子編

『国書がむすぶ外交』

本書の扉を開くと、五点の史料が口絵として掲載されている。その第一は「日本国王源道義」（足利義満）に宛てた永楽帝の勅書である。続く三点は豊臣政権の対南蛮交渉に関わるもので、豊臣秀吉が受領したポルトガル国インド副王親書、秀吉がそれぞれ「小琉球」（スペインのフィリピン総督）と「高山国」（台湾）に対して発給した書状から成る。口絵に見られる薄い金属板は、シャム国王の清朝皇帝への書簡である。本書は、このような前近代のアジアで取り交わされた様々な国書がむすぶ外交の実態に迫る外交史研究の新成果である。

紹介
編者の松方冬子氏は「総論」において、国書を「対等／非対等」という論点を超えて、ヨーロッパとアジアを対置せずに外交を論ずるための手がかり」とし、また「国書を送るという慣行から、外交を成り立たせた最低限の合意を見つけ出そう」と述べ、新

しい外交史研究のアプローチとそのめざすところを明記している。この背景にあるのは、既存の外交史研究に見られる「treaty system vs. tributary system」の構図（平等）なヨーロッパの条約体制と「不平等」なアジアの朝貢体制を対置させる見方への批判である。また国書に加え、通航証の検討も本書のもう一つの柱を成すが、これは国書外交と商人の往来との連動状況を視野に入れる必要性からだという。

本論は第一部「国書の世界」と第二部「国書の周辺としての通航証」に分かれる。まず第一部の第一章から第三章（橋本雄、清水有子、川口洋史）は順に、口絵の永楽帝勅書が「別幅」と誤解されてきた問題と室町期以降の朝鮮外交文書認識との関わり、豊臣政権の南蛮勢力宛て国書に装飾料紙が使われたことの意味や添付された訳文の機能、一八・一九世紀のシャム―清朝・阮朝間の外交文書に対する認識や文書翻訳の意図などを追究する。前記三論文に対し、第四章（原田亜希子）はヨーロッパの外交システムに関する事例研究として、一五・一六世紀ローマ教皇庁における駐在大使制度の成立とその政治的契機、大使の日常的活

動や資質を概観する。続いて第二部の第五章から第七章（岡本真、彭浩、木村可奈子）はそれぞれ、日明勘合制度の臨機応変の運用、明朝後期の渡海「文引」制度成立と「文引」取引の実態、明末期におけるシヤムの勘合使用のあり方や金葉の包装について解き明かす。勘合制度が発行先によって異なっていた事実や、文引と異国渡海朱印状の違いも、これらの研究を順に読み進めることで明瞭になる。第八章（蓮田隆志）は、ベトナム人権力者の義子として日越間の文書外交を支えた日本人貿易商の紹介と、外国人義子の社会的位置付けの考察である。

以上八編の論考のほか、計七編のコラムが付され、史料の紹介やケース・スタディにより本書の内容を充実させている。本書を通読することで、「総論」のいう「ある種の緩やかな合意や慣習」が前近代外交の現場に確かに存在したことを理解できるだろう。そして、再び口絵の国書に立ち戻れば、その外形的特徴の背後にある意味を讀者それぞれが見出すことができるはずだ。

編者は最後に本書の起点である共同研究

の目標を「各国、各時代の専門家が同じ海
で知識と経験を交換し合う『交易の時代』
を作り出すこと」だったと振り返る。本書
を機縁にこのような地域横断的な外交史研
究が一層進展することを期待したい。

(A5判 三六〇頁 二〇一九年一月)

東京大学出版会 税別六四〇〇円)

(阿久根晋 京都大学人間・環境学研究所

博士課程)